

---

# [連載中]3R

冴凪あやか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「連載中」3R

### 【Zコード】

Z8646Z

### 【作者名】

冴凪あやか

### 【あらすじ】

ある日突然現れた叔母に決められた同居生活。  
否応なしに決められ、行ってみるけれど…

青春真っ只中の少年少女が描く恋模用。

## Act・1 『桜の時』

淡いピンクの花びらが宙を舞い踊る。

風の速度に合わせ、時に早く、時にゆるいと。

散つて行くことが終わりを告げることを意味していくとも。

悪あがきもせずに、流れに身を任せの潔さ。

公園へと続く道。

道を示すように並べられた桜の街道。

初めて歩く場所なのに、何故か懐かしくさえ感じる。

見上げると、ピンクとも白とも取れる淡い不思議な空間。  
その隙間から見える空は、青く澄んでた。

少しの眩しさに顔を顰め、少年は、また歩み始めた。

時間を確認すると、間も無く一時半が来ることを告げていた。

そのまま慣れた手つきでリダイヤル画面を呼び出して確認するが、先ほど電話してから15分も経つていなかつた。

ぱーっと周りを見渡していると、色々な物が視界に映り、色々な音が耳に流れてくる。

楽しそうに声を立てながら遊具の隙間を駆け回る子供の姿。それを見守りながらも談笑に花を咲かす母親たち。ベンチに腰掛けた楽しそうにしているカップブル。

そんな人たちの姿が、のどかさを余計に引き立てていた。ふと、先ほどの電話を思い出す。

自分から掛けた置いておかしい話だが、初めて聞く声だつた。

『　　はい、葉月です』

駅から掛けた電話は、たつた一回のコールで取られた。

あまりの早さに少し驚いてしまい、すぐに声が出なかつた。

葉月と名乗つたのを聞いて、掛けた相手が間違いではないことは分かる。

女性の声だつた。

落ち着いていて、凛とした澄んだ声。

先方に同じ年の女の子がいると聞いていたのを思い出したので、きつとそうなのだろう。

『　…もしもし?』

何も云わない相手を不振に思つたのか、念を押して尋ね掛けられた。

『　あ、はい…中込悠羅ですけど…』

間の抜けた返事だと思つ。

けれど、元々電話の苦手な少年にはそれ以外にどう切り出せば良いのかすぐには分からなかつた。

『　駅に御着きになられましたか?』

名前を出したことで気づいてくれたのか、相手は話を続けてきた。

はつとする。

きっと、バックの賑やかな人の出す音やホームのアナウンスなどが電話を通して相手に届いているのである。『

『はい、そうです…。すみません…予定より一時間早く着いてしまつて…』

『…分かりました。すぐにお迎えに上がりたいところなのですが、今すぐは無理のようなので…もしよろしければ、近くまでおいで頂けますか?』

『はい、大丈夫です…お願いします』

『では、まずそこをますつぐに出られまして…』

説明してくれる道筋を周りを見て検討立てながら覚えようとする。

『…です。後はそちらの公園でお待ちいただければすぐにお迎えに上がりますので…よろしいでしょうか?』

『はい…お願いします』

用件を云い終え、こちらが理解したのを確認すると、お待ちしておりますと言う声を最後に、電話は終話された。

用件だけの電話と言うのは、こうこうことをこうのだらう。少し迷ったところもあつたけれど、それでも15分くらいでここに辿り着けたので、まあ、初めての場所に来るにしては早かつた方だと思うことにする。

そんな事を考えながらぼーっとしていると、誰かがまた公園内に入ってきた。

同じ年くらいの女の子だつた。

きょろきょろとしきりに辺りを見回して、誰かを探している様子。ぼーっとしていて忘れていたが、そついえば自分も人と待ち合わせをしていたのだ。

もしかしたらと思いつつ見てみると、どうやら相手もわざに気づいたようで、慌しく近寄ってきた。

田の前まで駆けてくると、軽く上がった息を落ち着けるよつこ、

少し前屈みに胸を抑えながら尋ねてきた。

「あつ、あの…悠羅さん…ですか…？」

ベンチに座つているため、少女の顔の位置の方が高かったので、見上げる形になる。

「はい、そうですけど…？」

なんとなく腑に落ちないのは、先ほど電話した相手の声とは違つていたからだ。

電話だからだつたのだろうか。

でも、自分の名前を呼んだし間違いはないようではあるが…

「よかつたあ…会えて…！」

安心したように笑つて体制を直す。

青いアンサンブルになつた上着と、裾に刺繡の入つたチームのスカートに紺の靴下。

足元のスニーカーの結び目が解け掛けていた。  
よほど急いで来てくれたのだろう。

「ごめんね、遅くなつて…」

すまなそうに謝つて来る少女。

「いえ、こつちが早く着すぎたから…すみません」

そういうと、少し嬉しそうにして自分を見てきた。

「迷わなかつた？」

「はい…一本道のようなものでしたし…」

「そつか、よかつたあ。わたし、ちよつと家にいなくてね、携帯に

電話貰つて飛んで来ちゃつた」

「すみません…」

悪いことをしたと、素直に謝ると、首を振つてそんなことはないのだと云つてくれる。

「わたしが会うの楽しみにしてたから急いで来たんだよー?」

そう笑う田の前の少女に、自分も少し緊張が緩む。

そういえば、急いで連絡を貰つたと云つていたけれど…

先ほどの電話はこの少女の声ではないのだろうか。

「じゃあ、誰が…?」

そんなことを考えていると「じゃあ、行こつか?」と、荷物を持ち上げようとしながら声が掛かった。

どうやら、自分の荷物を持とうとしてくれているらしい。

「いえ、自分で持ちますから…」

慌てて持ち直す。

「そう? 疲れてそうだし、わたし持つよ?」

「いえ…悪いですか…?」

そういうと、少し拗ねた様に窘められた。

「今日から一緒に住むんだから、遠慮しないの?」

どう返していいか分からず、苦笑する。

ゆつくつと、喋りながらその公園を後にし、また、あの桜の下を通つた。

名前を尋ねると、少女は、玲奈と名乗つた。

そのとき少し寂しそうに笑つたのが気になつたが、すぐに戻つたので何も云わずにあいた。

彼女は、間違いなく自分の叔母に当る人物の娘らしいので、従姉になる。

「ここから、家は五分くらいなの」

そういうながら嬉しそうに少し先を歩きながら、付いて来ていることを確認するように、たまに振り返る。

「桜、綺麗でしょー。ここは結構雪振るから桜前線は遅いほうなんだけどね、今年は早かつたみたい」

「そなんですか…?」

同じように桜を見上げてみる。

そして、ふと視線を戻すと、玲奈は自分の方を見ていた。

「…？」

「…あつ、『じめんね』」

玲奈は自分が見入っていた事に気づき慌てて目を逸らす。

「う、ううう…何かついてる…？」

「違う違う、そんなのじゃないよ」

「…？」

「『じめんね』、ほら、悠…羅くんは覚えてないかもしねないけど、わたしは小さい頃何度か遊んだ記憶があるからね、随分変わったなーって思って。でも、もう十年以上前だし、変わって当たり前なんだよね」

「会つたことあるの？」

「やつぱり…覚えてないんだ？」

寂しそうな笑い顔。

先ほど名乗つたときのあの顔を思い出す。

「『じめん…』」

「あ、謝るじとじやないよ。気にしないで。で、家もうすぐそこだから」

「う、うん…」

そう言つて誤魔化すように腕をぐいっと引いたかと思つと少し掛け出され、思わず体制を崩すが、何とか持ち直し付いていく。曲がり角を曲がると、大きな家が見えて、そこで玲奈は止まった。洋館…と言えるかも知れない。一般住宅と言つても、洋館と言つたほうがしつくりとくる大きさだ。

「…」

気後れしながら尋ねると、嬉しそうに一いつ返事が返つてくる。

「ほら、入つて入つて？」

引っ張られ、玄関に辿り着く。

開かれた玄関の中は、予想通り広かった。

玄関から長めの廊下や、いくつつかの部屋の扉や階段が見える。

そして、何より驚いたのは、すぐ田の前にまるで自分たちを待つように立っていた人物の存在だ。

金髪碧眼。まるでフランス人形のような女性。

「お帰りなさいませ」

軽く頭を下げて出迎えるその人は、先ほど電話に出てくれた人と同じ声をしていた。

より鮮明な、はつきりとした声。

「ただいま、ユウナさん。悠羅くん連れて來たよ」

そう言われて、ユウナと呼ばれた人物は、自分の方に視線を向けてきた。

瞬間、その青い瞳と田があう。

「ユウナさんはね、うちのメイドさんなんだよ」

横で玲奈に説明された。

この「」時世にと思うかもしれないが、実際の屋敷を見た後だから、メイドの一人や二人いてもおかしくはないと納得する。

「えと、初めまして… 今日からお世話になります」

「…初めまして。ユウナと申します。悠羅様」

名前を様付けで呼ばれたことのなかつた悠羅はくすぐつたさを覚える。

「あの…悠羅でいいです…よ…」

「いえ、私はメイドですから」

はつきりと引かれた一線をそこに感じた。

「ユウナさん、強情だから…」

苦笑交じりに玲奈が悠羅に声を掛ける。

「…」

無表情な彼女からは、感情が読み取れない。

怒っているのだろうか…？

「ほら、ユウナさん、笑つて笑つて。ユウナさんに睨まれて、悠羅くんびつくりしてるよ?」

くすくす笑いながらそう玲奈がそう諭すと、ユウナが少し顔を赤

らめた。

「に、睨んでなんかいません…っ！」

不機嫌なのではなく、感情を出すのが苦手なのだ。  
それに気づくと、安心した。「コウナさんも、悠羅くんに会える  
の楽しみにしてたんだよ、ね？」

わざと玲奈がそういうと、コウナの顔が益々赤くなつた。

「わ、私はメイドとして…」

「はいはい、照れないの」

「玲奈様っ！」

完全に玲奈のペースで遊ばれてるコウナを見て、悠羅は笑つてしまつ。

「ほら、悠羅くん笑つてるよっ！」

「……」

笑い顔の玲奈にそう言われ、まだ赤い顔で少しうつりとして自分を見てくるコウナ。

だが、先ほどとは違い、それが可愛くさえ見える。

「立ち話も何だし上がるつー」

玲奈はそう言つて先に靴を脱いで上がると、スリッパを履いた。

「さ、悠羅くんも」

どうぞ、と促され「あ、お邪魔します…」とこうと、こうと怒られた。

「ここは、今日から悠羅くんのお家なの。家に帰つたらまず『ただいま』でしょ？」

「え…」

「ほら」

妙に恥ずかしさを感じるが、一人の田に負けて素直に口にする。

「ただいま…？」

そんな様子に満足したのか、玲奈とコウナが顔を合わせ笑い合つてから答える。

「おかえりなさい、悠羅くん」

「おかえりなさいませ、悠羅様」

## Act・1 『桜の時』（後書き）

### \*Character

中込悠羅（15）：主人公、高1。玲奈の従弟。クラスは1

-A

葉月玲奈（15）：悠羅の従姉。同居先の住人。クラスは1

-A

ユウナ（？？）：葉月家のメイドさん。謎の多いひと。

堀江紗枝（15）：玲奈の小学校時代からの友達。クラスは1

-A

荻原歩美（15）：紗枝の中学時代からの友達。クラスは1

-A

河口隆志（15）：悠羅の押し掛け友達。1-Bで隣のクラス。

## Act・2 『嵐のよつよつ人』

「…悠羅様。悠羅様」

遠くから声がする。

重い瞼を開くと、そこには青い瞳があつた。

「…！」

あまりの驚きに、思考が一気に覚醒する。

同時に跳ね起きた。

「ユ、ユウナさん…？」

「おはよっございます。悠羅様」

驚いている悠羅とは対照的に、落ち着くの声の主は、淡々と朝の挨拶から始めた。

「おはよっ…って何でここに…？」

「それは、悠羅様。そろそろ悠羅様を起しますよつ、玲奈様が言われたからです」

「そ、そつ…」

「勝手に入つてしまい申し訳ありません。何度も外から声を掛けさせて頂いたのですが、一向にお返事がなかつたので…」

流石に勝手に部屋に入ったのはまずかつたと思ったのか、すまなそうに謝る。

「う、ううん、い、よ…ありがとつ…」

時計を見た。

春休みも終わり、これから三年間通う高校の入学式が今日ある。

「内線の子機をお持ちしましたので、今日からこれを枕元に置いておいて下さい。番号はこちうに…」

差し出された子機と充電器を悠羅が受け取るのを確認すると、ユウナは一礼して部屋を出て行つた。

「お支度が整いましたら、居間にお越し下さい。」

それを確認してから、悠羅は一息ついた。

朝から驚かされる。

今までとはまったく違った生活に。

こうやって、朝起きて、誰かの顔を最後にみたのは、いったいどれくらい前だろうか。

それさえも思い出せない。

ずっと、一人で生活していたのだから。いや、一人と言つと語弊がある。

実際は、父親と二人暮らしだった。

とはいっても、お互に顔を合わせることも珍しく、一ヶ月に一回顔を合わせば良い方で、でもそれは別に仲がいいとか、悪いとかではなく、ただ、職業的に父親は忙しく、自分と生活リズムが違っていたからだ。

それに、父はこことは別の家も持っていた。

母親のことは分からぬ。父も何も言わなかつた。自分から聞こうともしなかつた。

週に三回、お手伝いさんの来てくれる生活に不便はないし、それでいいと思つていた。

だから、こうやって誰かに起こされることなんて、思いもよらなくて、今朝はびっくりした。

ここに来たのは、叔母に誘われたからだ。

三ヶ月前、ある日、突然現れた叔母はこう言つた。

『お久しぶり、悠くん?』

悠くん。

久しぶり話す甥にも気さくな叔母。

久しぶりとはいっても、俺にその記憶はないから、ほぼ初対面に近い。

向こうは自分のことを良く知つてゐるようではあるが。

彼女は、父の姉とは思えないほど、陽気な人だった。

いや、実際自分の父親とろくに話すことすらない自分には、父がどういった人かも、父の”見せている”表面しか知らない。

『うーん、達也の若い頃そつくりね。良い男になるわよー』

そう言つて笑う叔母。

自分の弟を良い男と認めているらしい。

『達也は、相変わらずブラウン管の中で忙しいようね…』

苦笑交じりに咳くと、申し訳なさそうに自分を見てきた。どうして叔母がこんな表情をするのかは分からなかつた。

『そうですね…』

俺は、点いていないテレビを見た。

そこは、家にいない父の姿を良く映している。

会うことはなくとも、そこで父を一方的に見ることは出来た。

父は俳優で、人気も高かつた。

その反面、プライベートは謎で、きっと俺が達也の子供だと言つことを知つてゐるのは、この叔母くらいなのだと思う。

『それでね、悠くん。今日は悠くんに用があつて來たの』

『はい…?』

『悠くんさえ良かつたら、家で住まない?』

そんなことをさらつと口にして、叔母は目の前にある熱い珈琲に

口付けた。

『あら、この珈琲美味しいわ。悠くん淹れるの上手いわねー』

どうやら、マイペースな人らしい。

本当に父の姉なのだろうかと疑つてしまつ。

『私は間違いなく達也の姉よ?』

人の心境を読むのが上手いらしい。

絶句している俺を、楽しそうに見ている。

『悠くん、次高校生でしょ?』

『あ、はい…』

いきなりの質問に一瞬身体がびくつとなつた。この人と話しているとペースが乱される…。

『それで、よかつたからうちの高校受けて、春から一緒に住まないかなつて思つて』

『思つてつて……こちなり……』

『嫌かしら?』

『いえ、嫌と言つわけじやなくて……』

『高校もう決めてるの?』

『いえ……』

『決めていなかつた。』

特に行きたいところもしたいこともないし、進学しようかさえ悩んでいたところだ。

『こつちにね、良い高校があるのよ、良かつたらぜひ受け見ない?』

『いえ、そんな急に……』

『あら、悠くん成績悪くないでしょ?』

『悪くはないんですけど……』

『じゃあ、大丈夫よ。うちの娘……あ、家にも悠くんと同い年の娘がいてね、その子がこれがまた誰に似たのか英語が苦手でね。そのせいで今ひいひい言いながら塾通いしててねー馬鹿よねー』

『あの……』

『ああ、それはどうでも良い話ね。で、その娘が行く高校がね、良い高校なのよ。あなたのお父さんも、私も通つた学校よ。去年、改築が完成してね、かつなり綺麗になつてるわよー。羨ましいわ。でも、あなたさえよかつたら是非その学校を勧めたいの』

『……は、はあ』

『一度受験してみましょつよ、これ。パンフレット。一応田を通してね?』

そう言って、その日は叔母はそのまま帰つた。  
その後は嵐が去つたようだつた。

その時のことを思い出して苦笑する。

その後、極め付けがあった。

願書締め切り三日前、叔母はまた俺の前に現れたのだ。

『悠ぐるん？』

『は、はい…』

また、何故か家に入れてしまったのだ。  
そしてまた後悔する。

どうやら気に言つたらしい俺の淹れた珈琲に口付けながら目を細め睨んできた。

そして

『…豆えた？』

『…』

『私、前の方が良かつたわ』

何てことを口にする。

『つてそうじやなくて、願書、出してないでしょ？』

『う…何でそれを…』

『叔母さんに知らないことなんてないのよ』

そう叔母は言い切つた。その言葉に何故か納得してしまう。

『で、パンフレットは見たの？』

『はい…』

『どうだつた？』

珈琲を啜りながら叔母が尋ねてくる。

パンフレットは確かに目を通した。

綺麗な校舎。良やそうな校風。

この辺りにある高校より良いと思つた。

『嫌かしら？』

『いえ、嫌と言つわけでは…』

本当だつた。実際、その学校には惹かれる部分があつたから。

だが、話は別にある。

叔母の世話になるということだ。

叔母には叔母の家庭がある。

それを邪魔することが悪いと思つた。

そんな俺の心中を察したのか、叔母が再度口を開く。

『家の事ならいいのよ? 家の家は達也の家でもあるんだし』

『……』

『元々、あの家は達也に相続の権利があつたのよ。でも、達也が住む気がないみたいだし、私たちが住んでるだけ。ってわけで、決定ね』

『は……?』

『どういづわけなのだう? と想つが、叔母は有無を言わせぬ態度で』

『うつ言つた。』

『そ、今すぐ願書、書きなれ』

俺にとって、叔母の印象は強烈だつたのだ。

だから、ここに来るときも、内心どんな生活が待つているのだろうとびくびくしていた。

それが、だ。

ここに来て、叔母は居なかつた。

居たのは、従姉妹の玲奈と、メイドのユウナだけだつたのだ。

「あはは、お母さんね、お父さんの単身赴任に付いて遺跡堀いっちやつたー」

あつけらかんとそう言つ玲奈の言葉に、俺は絶句した。

「帰つて来られるのは当分先かと思つます……何せ行き先が分からないもので……」

ユウナまでそんなことを言い出したのだ。

とたん、家の電話が鳴り出す。

ユウナが慌てて受話すると、相手と、3回話し、すぐ元へひりに受話器を持ってきた。

『え……?』

『玲香様です』

コウナの言葉にまた驚く。

あの人は、本当に不思議な能力でもあるのではないかと思った。

「もし、もし…？」

『あ、悠くん？』

『ごく自然に切り出す。

『ごめんねー、急に。びっくりした？』

びっくりしない人はいないと思つ。

そう心の中で呟く。

『うーん、そうよねえ』

「…？」

『まあ、私もびっくりしたのよ。いきなりでねえ』  
嘘だ、絶対嘘だ。

この楽しそうな声が全てを語つている。

『ま、そういうことで、うちの玲奈ようしきね、そのつまんが飽きた  
ら帰るから』

がちやつ、つーつー…

後に残されたのは虚しい音だけだった。

今思い出しても強烈な人だと思つ。  
嫌ではなかつた。

今までの平凡な生活とは違つたから、戸惑いはあつたが、残りの  
春休みを過ごしたこのでの生活は、前の一人での生活よりも楽しか  
つた。

そんなことを思い出しながら、身支度を整える。  
上着を羽織つたとき、真新しい制服の匂いが広がつた。

居間に着くと、玲奈が座つてお味噌汁を啜つていた。

葉月家の朝は朝は和食と決まつてゐるらしい。

お味噌汁と焼き魚の良い香りがしてゐた。

「あ、ゆんゆんおはよー、先に食べてるよー？」

「うん、おはよう」

“ ゆんゆん ” それは、玲奈が俺に付けた愛称だった。

初めは抵抗があったものの今ではすっかり慣れた。

そして、この数日で、俺も “ 玲奈 ” と呼ぶ事に慣れた。

初めてあつたイト「 」と書つても同じ年、気軽に呼び会つまうが良いに決まつている。

「 おはようございます、お食事をどうぞ」

後からやつてきたユウナさんが、俺の分の食事を運んでくれる。

「 うやつて、朝から美味しい食事が用意される生活は、嬉しいものだ。 」

席に着いて、食事を口に運ぶ。

「 うん、今日も美味しい。 」

「 それにしても、ゆんゆん朝弱いねー？」

「 う… 」

「 私も朝からあんなに声を出すの苦しかつたです… 」

「 う… 」

「 玲奈だつて春休み中は毎過ぎに起きてただろ… ？」

反撃を開始すると、今度は玲奈が口籠る。

「 う… 」

そう、玲奈が今日早かつたのは、単に入学式、いつもと違つた日が楽しみだつたからなのである。

普段は悠羅と同じ、自分では起きられない人種だ。

いや、悠羅よりも玲奈の方が数段上だつた。

「 お一人とも、もう高校生になられたのですから、もっと御自分で責任持つてくださいね」

そうユウナに窘められ、一人は声を揃えて返事をした。

「 それはそうと、悠羅様 」

「 うん？」

悠羅は魚の小骨を取り除きながら、顔だけユウナに向けた。

「 今朝、魔されていたようでしたが、大丈夫ですか？」

「あー、うん。」

「んー、夢で魘されてたの?」

「うーん。多分色々見てるんだろうけど、起きたときに今は少ししか覚えてない何か昔からたまに見る夢があつて」

「ふーん?」

玲奈が橋を口に咥えながら興味深そうに聞いている。

いつもなら、そんな玲奈を行儀が悪いと叱るコウナだが、今日は違つていた。

「昔からですか…?」

「うーん?うん」

昔から…

でも、最近良く見るなと思つ。

「どんな…」

珍しくコウナが深く尋ねようとしたとき、玲奈が叫んだ。

「あー!」

「ど、どひした?」

悠羅の意識がそつちに集中する。

「にゅ、入学式の時間間違えてた…集合は九時じゃなくて八時半…ーーー?」

「ゆ、ゆんゆん、急いでーーー」

食べかけの食事を恨めしく見ながらも、即座にカバンを持って家を出なければ行けなくなつた。

「何で確認しないの?ーーー」

「じゃあなんでゆんゆんも見とかなかつたのーーー?」

「うひひひひひ」

「うーん」と言つてゐる場合じやないでしょーーー!」

「そ、そうだな」

どたばたと、玄関に走る。

振り返り、見送りに出てくれてこるコウナさん、「行つて来ます

!」と叫ぶと、一人は一斉に飛び出した。

後に残されたコウナさんが苦笑交じりに溜息をつきながら後を見送った。

「二つめがしゃいます。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8646z/>

---

[連載中]3R

2011年12月27日21時49分発行